

第6学年の実践

(1) 実践内容「ふるさと甚目寺～われら歴史・文化調査隊～」

① はじめに

「言語活動の充実」や「高め合う場面の工夫」として6年生が取り組んでいることは、総合、道徳だけでなく、国語科や社会科などの学習においても積極的に「シンキングツール」を活用することを行うことにしている。シンキングツールを使った話し合い活動においては、少人数のグループであること。個々の考えを書いた付箋を使うことにより、自分の意見が出しやすく、互いの意見を読み合うことで、認め合う雰囲気が生まれ、意見交換がしやすくなった。またチャートで分類することで、意見の整理がしやすく話し合いの方向がはっきりするため、話し合いの内容を深める手だてにもなっている。そしてシンキングツールでの結果をもとにグループの意見をまとめることで、学習内容を深く理解することができるようになったと考える。また、グループでの話し合いやまとめをもとに、授業ごとに工夫したワークシートを使用して最終的に自分の考えを確認している。このような学習パターンを総合学習や道徳の時間だけでなく、他教科にも取り入れ繰り返し練習することで、どの子も生き生きとした表情で学習に積極的に取り組む様子を見ることができている。

② 「見て、聞いて、触れて甚目寺」～甚目寺の歴史・文化にズームイン～

6年生は総合学習と道徳を中心に、ESD と絡めた実践に取り組んでいる。

ア 「わくわくマイプランイン京都」

1学期の修学旅行では、「見て、聞いて、触れて京都」をテーマに、自分たちで立てた京都分散計画に従って、地元のボランティアガイドの方たちとともに、京都の町を5人ほどの少人数で巡りながら、京都の歴史に深く触れる機会をもった。その興味は自分たちのすむ地域の歴史へとつながり、6年の総合「ふるさと甚目寺～われら歴史・文化調査隊～」、「見て、聞いて、触れて甚目寺」の地域学習が始まった。

イ 「われら歴史・文化調査隊」

あま市歴史民俗資料館の学芸員さんによる出前授業で甚目寺の史実、遺跡、偉人、伝統芸能についての概略を学ぶことで、地域の歴史学習への導入を図った。そこで自分たちの住む甚目寺の歴史の深さを知り、その中からさらに調べたいテーマを決めることができた。「甚目寺説教源氏節」「ハンセン病と小笠原博士」「甚目寺観音」「萱津神社香の物祭り」「鎌倉街道と萱津合戦碑」「小町塚・清明塚と甚目寺飛行場址」の大きく6つに分けたグループで、「甚目寺説教源氏節」を除く5つのグループが夏休みを利用して取材活動を行った。実際に現地を訪ね、遺跡、街道、建物を見て、甚目寺歴史民俗資料館、ふれあい人権センター、萱津神社の方たちの話を聞くことで各テーマについて深く学習することができた。また2学期が始まってすぐに、「甚目寺説教源氏節もくもく座」の出前授業に全員で参加した。「もくもく座」の今回の演目があま市美和地区の「葛ノ葉稲荷神社」につながりのあるものだったので、源氏節の鑑賞に加えて、今年はいま市人権実行委員会の方たちの話も聞くことができた。このように地域の方々に支えられて、地域学習をすすめることができた。



【夏休みの清明塚での取材】

ウ 「甚目寺のすばらしさをつたえよう」

今までの出前授業や取材活動で得た情報に加え、インターネットや図書室にある郷土資料を活用して、11月の総合学習発表会に向けて積極的に活動した。そして発表会当日は大勢の保護者や地域の方たちの前で、学んだことを情報発信した。

エ 「地域ボランティアになろう」

2月3日の甚目寺観音の節分会に参加したり、初観音の日に地域清掃活動を実施したりして、甚目寺の伝統行事や地域活動に積極的にかかわりながら活動した。また、総合学習で学んだことを「新聞」や「リーフレット」などのかたちでまとめ、校内だけでなく、市役所や公民館、商工会議所や大型商業施設などの協力を得て、情報発信活動の機会をもった。地域

の人も知らない「甚目寺のよさ」を知ってもらえたことは、「歴史・文化調査隊」として、学習への取組の充実感につながった。

③ 高め合いの授業実践

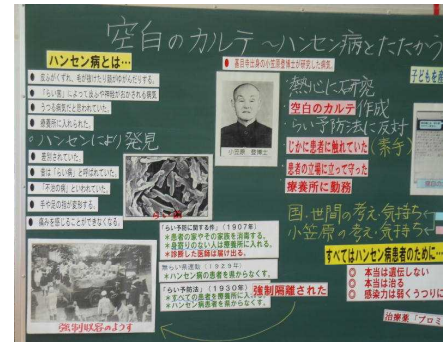
ESD道徳 主題「空白のカルテ～ハンセン病と闘う～」〈公正・公平・正義〉

ア 導入の様子

「ハンセン病」について知っていることを発表させた。
1学期に「ハンセン病」についての出前授業を受けたこともあり、ハンセン病について知っていることについて意見がたくさん出た。

児童の反応

- ・ らい菌によって皮膚や神経がおかされる病気
- ・ うつる病気だと思われていた。
- ・ 療養所に入れられた。
- ・ 差別されていた。
- ・ ハンセンにより発見された。 など



【貼付カードを使った
導入の様子】

イ 展開「考える段階」の様子

資料（自作資料）を読んで、ハンセン病患者を苦しめた差別や偏見について知り、そんな中で小笠原博士がとった行動について考えさせた。

児童の反応

- ・ 熱心に夜遅くまで研究した。
- ・ 「空白のカルテ」を作成した。
- ・ 「らい予防法」に反対した
- ・ 素手で患者に触れた。
- ・ 患者の立場に立って守っていた。
- ・ 療養所に勤めた。

※資料から子どもたちの意見はしっかり出た。



【付箋に書いた意見を
みんなで分類・整理】

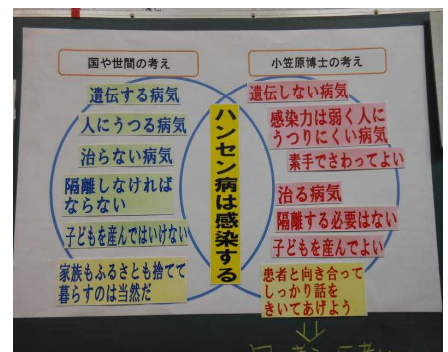
ウ 展開「高め合いの場面」の様子

(ア) 付箋の活用

「国や世間の考えや気持ち」「小笠原博士の考えや気持ち」というキーワードについて、付箋を使って個々の考えを書かせた。付箋を使うことは、どの児童も自分の考えを積極的に書くことができ、どの児童も話し合いに参加できるという点で効果的であった。

(イ) シンキングツール「ベン図」の活用

当時のハンセン病に対する誤った世間の認識に対して反対の立場を主張し、自分の信念を貫いてハンセン病患者のために闘った博士の正義感を強く印象づけるために、ベン図を使って博士と世間の二者の考えを比較させた。ベン図の重なり部分にはハンセン病は感染するという言葉を入れさせ、両者の間には「ハンセン病は伝染病である」という共通認識があったという事実も比較をする前にしっかりと押さえた。ハンセン病に対する出発点の考えが同じでも、全く正反対の捉え方をしていることがチャート図からより明確になることで、小笠原博士がいかに



【ベン図を使って
2つの意見を比較】



【グループでまとめた意見を
リーダーが発表】

周りの意見に流されず、努力を重ねて研究を続け、その上で、自分の考えを信じて信念を貫いた功績の大きさを確認することができた。児童は付箋に書いた意見をこのベン図に分類・整理させながら話し合いを進めることで、互いの意見を聞き合うことができ、共通点や相違点を確認し合うことで、意見を深めることができた。そして話し合いで深めたハンセン病に対する認識や小笠原博士への思いについて、グループごとに発表させた。

比較ベン図からグループがまとめた意見の一例

小笠原博士はひとの気持ちを思いやることができる勇気ある人だと思う。博士は周りに反対されても、ずっと自分の考えを主張し続けたからである。自分のことよりも相手のことを考えて、カルテを空白にする勇気があった人だ。私たちは見習って、思いやりのある人間になりたいと思っている。

(ウ)「カルテ型ワークシート」の活用

小笠原博士が使っていたカルテの形式でワークシートを作成した。病名を書く欄やそのような診断をした理由を書くようにし、自分だったらハンセン病患者にどう向き合うかについて、小笠原博士の気持ちに寄り添わせながら考えさせる工夫をした。その結果、全員の児童のカルテの病名が空白、もしくは皮膚病と書かれており、患者を強制隔離から守ろうとする児童らの正義感が伝わってきた。

【漢字ワークシート】
ハンセン病と闘う
もし、あなたが小笠原博士の立場だったら…

平成 27年 11月 5日

STATION.

姓 名

Name (あなたの名前)

※ そのような診断をしたのは、どうしてですか？

人間として伝染したり、治らないと言われてたりして差別されるライ病患者の人たちを見捨てることはできないし、同じ人間なので人権が奪われることはおかしいと思った。

※ 今回の授業で考えたこと、思ったことを書きましょう。

小笠原博士はひとの気持ちを思いやる人だ。ずっと自分の考えを主張し続けたからである。自分のことよりも相手のことを考えて、カルテを空白にする勇気があった人だ。私たちは見習って、思いやりのある人間になりたいと思っている。

【カルテ型ワークシート に書かれた決断】

「自分が小笠原博士だったら…」という立場でカルテの病名欄にどのように書くかを決断させた。

※子どもたちの決断（33名）…… 空白 28名
別の病名 5名

【空白にした児童の理由】

- ・ 人間として伝染したり、治らないと言われてたりして差別されるライ病患者の人たちを見捨てることはできないし、同じ人間なので人権が奪われることはおかしいと思った。
- ・ 自分の判断でその人の人生を奪うのはいやだから空白にした。
- ・ 同じ人間として生きる権利があるから、カルテを空白にすることによって、たとえ違法を自分は犯すことになるかもしれないけれど、それでたくさんの人の人権が守られるから。

【別の病名にした児童の理由】

- ・ 何も書かないのもかえって気になることだから、あえてハンセン病ではない別の病名にした。
- ・ 空白にしてしまうと自分に危害が加わるかもしれない。でもハンセン病患者の人を療養所にも行かせたくないし、守りたい、という思いから別の病名を書いた。

エ まとめ「ふり返りの場面」の様子

「ハンセン病」に対する正しい知識や小笠原博士の正義感を知った上で、「今後の自分たちに何ができるか」について考えさせた。誰とでも仲良くし、互いに認め合うことが、一人一人の命を大切にすることにつながる、そんな考えをもってくれば…という期待を込めて取り組んだ場面である。この授業のまとめの段階として児童の「ふり返り」を以下に

紹介する。

ワークシートから

- ・ 日本は今だからこそ、平和で個人の人権が尊重される時代になってきているけど、昔はひどい政治をしていたんだなあと思いました。治らないと言われて療養所に入れられて、家族にも会えず、寂しく亡くなった人はいったいどれだけの数いたのか…と思いました。それを考えると胸が痛みました。小さなことだけど、クラス一人一人の人権も大切にしていきたいです。甚目寺が人権の町であるのは、小笠原博士の存在も大きかったと思います。同じ甚目寺出身として誇らしく思います。
- ・ 人間は一度恐れると自分を守ろうと、それを排除することがわかりました。小笠原博士みたいに人を思いやり、患者の立場に立って考えられる人がたくさんいたら…と思いました。どんなに小さな悩みでも一緒に悩むか、解決できる人になりたいと思いました。この授業で人は人を簡単に傷つけることができること、人は人の優しさに触れた時、喜びやありがたみがあふれてくることがわかりました。私も知らない人でも困っている時は助けて、幸せを配れる人間になりたいです。

④ その後の活動から

11月の総合学習発表会で、「ハンセン病」をテーマにしたグループは、この学習で学んだことを、模造紙にまとめたり劇化したりして発表した。ハンセン病の説明やその歴史、伝染病ではないこと、そして国が過ちを認め謝罪した現在でも差別に苦しむ人たちがいることなど、この問題の抱える根深さを、保護者に向けて発信した。また、そのハンセン病を研究して、当時の世間や医学界を相手に信念をもって闘った郷土の偉人、小笠原登博士の人柄が伝わるエピソードを自作の劇を通して紹介した。発表会を終えたグループの個々の感想は以下であった。

発表後の感想

- ・ 患者が強制隔離されてしまうから、カルテをわざと空白にしたなんて、すごく勇気があると思った。ぼくはそんな違法ぎりぎりなことはできないと思った。なので博士みたいに勇気をもちたい。そんな博士と同じ町に住めてうれしい。
- ・ 小笠原博士が他の医者たちに責められても絶対にあきらめないことがすごい。小笠原博士のような人と同じこの甚目寺に生まれてうれしい。
- ・ 小笠原博士のことを知るまで、この町に無関心だった。博士のような強い意思と人を思いやる気持ち、そして一つのことに向かってどんな苦難や批判があっても、絶対に意思を貫き通す人になりたい。この町の一人として小笠原博士を敬う気持ちを大切にしたい。
- ・ ハンセン病という大きな病気に人生をかけてかっこいい。そんなすごい博士が同じ甚目寺の出身ということ誇りに思う。

(2) 実践の成果と課題

岐阜県出身の「杉原千畝」と、郷土の甚目寺出身の「小笠原登博士」について取り上げ、共に自作教材を作って ESD 道徳を実践した。2つの実践で試みたことは、「もし自分がその立場に置かれたらどうするか」という個々の決断を「高め合いの場面」に取り入れたことである。「千畝」の授業ではビザ、今回の授業ではカルテの形式のワークシートを使用したことで、児童らは二人の気持ちに迫りながら考えを深めることができた。また本校が大切にしている人権教育にも絡めた取組でもあり、これらの授業を通して多くの命を救うために尽くした郷土の偉人の業績の素晴らしさに感動するだけでなく、自分を大切に生きていくことが他人の命を大切にするに、そして自他を大切にすることが差別をしない心につながることを理解した。しかし命や差別の問題は広く深いテーマなので、今回の授業実践に留まることなく、今後も題材を精選しながらの道徳の授業や日々の学校生活において、機会を捉えて継続的な指導を続けていく必要を強く感じている。